OPINION

探究学習でつくる若者の未来と高大接続の可能性

高校と大学、両者にとって有益で、かつ高校生の成長に資する大学の探究学習支援のあり方とは？ 学生時代から20年にわたり、探究支援に携わる今村亮氏に話を聞く。

〝やらされ探究〟とリソース不足に課題

私にとって、探究学習の可能性を知る原点はキャリア教育です。20年前、大学で友人に誘われて参加した*NPOカタリバでは、高校生と車座になって対話し、彼らの進路発見をサポートしていました。以来、高校生のキャリア支援や教育プログラム立案に携わり、現在は桜美林大学の高大連携コーディネーターを務めています。

2022年、高校の教育課程に「総合的な探究の時間」が新設されましたが、現在の探究とつながる考え方は以前からあり、約40年前の臨時教育審議会でも議論されていました。ただし、探究的な取り組みが進んでいたのは小・中学校までででした。それがようやく、高校でも教科として本格的に実施されるに至ったのです。

探究学習とは一言でいうと、「学習者本位の学び」です。自分自身の主体性に気づき、自ら主体的に学ぶ、〝生徒が主語の学び〟です。体験をベースにしたプロジェクト型の学習という点も特徴です。生徒自身が課題解決の体験を通じて自らの可能性に気づき、主体的な学びへとつなげるプロセスこそが重要だからです。震災復興や街づくり、ビジネスコンテストへの参加、ゲームクリエイト。これら一部の生徒たちの校外での自主活動―学校からは評価されていなかった―は、実は立派な「探究学習」です。

「総合的な探究の時間」は必修化されたものの、教科書がない、成績も付けなくていい、内容が学校の解釈に委ねられた教科であるため、どの高校も苦戦しています。

そもそもプロジェクト活動や生徒主体の学びは、座って授業を受けるだけの学校教育とは相性が悪い。特に探究の「問いの設定」は最大の悩みです。教員から「自分のテーマを見つけなさい」と指示されて、「わかりました。見つけます」と取り組むのは受動的な学習行為。学習者本位にはなりません。「やらされ探究」「あやつり探究」にしないためにはどうすべきか。この点に多くの高校教員が頭を悩ませています。

探究学習の環境を整えられない高校も多く見られます。中には、自治体や企業、地域住民の協力を得て展開している学校もありますが、これはまだ一部。プロジェクト型学習と相性のよい農業高校など専門高校と比べて、普通科の高校が最も苦労しています。今、高校は大学同様、スクールポリシーの策定が義務化されていますが、ポリシーにのっとって積極的に探究に取り組む高校と、そうでない高校とに二極化しつつあります。教員も、熱心な教員と戸惑う教員とに分かれている状況です。

教育コーディネーター **今村 亮** いまむらりょう

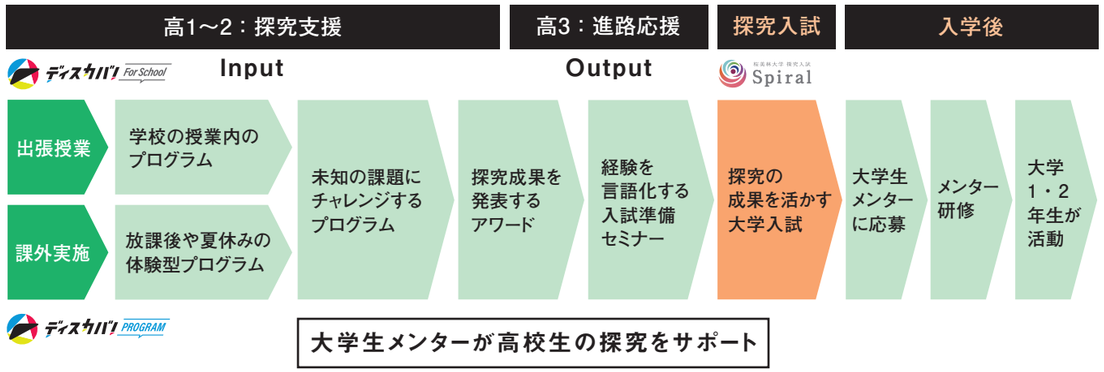
2003年 東京都立大学在学中にNPOカタリバに出会い教育の道を志す。
2010年 大学卒業後、大手印刷会社勤務を経てNPOカタリバに入職。ディレクターとして多数の教育事業創出を手がける。
2019年 NPOカタリバを独立し、桜美林大学と「ディスカバ！」を立ち上げた後、東京都の創業支援事業に選出され2020年に法人設立。

株式会社Discovery Studio代表取締役。文京区青少年プラザb-lab館長、文部科学省熟議協働員、岐阜県教育ビジョン検討委員会委員を歴任。桜美林大学高大連携コーディネーター、慶應義塾大学非常勤講師、NPOカタリバパートナー、中野区区民公益活動推進協議会委員も務める。

取材・文／本間学　撮影／木藤富士夫

＊学校に多様な出会いと学びの機会を届け、社会に10代の居場所と出番をつくることをめざすNPO。全国高校生マイプロジェクトなどを運営

探究学習支援から入試までの設計の例～桜美林大学ディスカバ！ プロジェクト全体像



大学の探究学習支援で高大双方の学びの質向上

そんな課題山積の高校の探究学習に、大学が関わる意義は何か。私は、2つあると思います。

一つは、今の若者の置かれた環境に資するからです。ネットやSNS中心の情報、人間関係。傷つかず、居心地はいいが、狭いコミュニティに彼らはいます。しかし、実際の社会は違います。探究を通じて安全圏の中で閉じた世界から一歩踏み出し、異物や他者と触れ合い、時には失敗する機会の提供は、若者を社会に送り出す教育機関としてすべきことです。

大学にとってのメリットもあります。高校の学びをよくすることによって、結果的に大学に来る学生の質も上がるからです。そもそも大学は、学ぶ目的を学生自身が見つける場です。高校までの間に探究学習を経験したほうが、大学で求められる主体的な学びにすっと入っていきやすくなります。課題に対して「ネット検索レポート」を提出するような学生に困っているなら、なおのことです。

私が関わる桜美林大学では、教科学力以外の軸で自学の学びへのレディネスを形成するため、「ディスカバ！」という探究学習支援やそれを評価する入試に取り組んでいます。その実践を基に、探究のサポートを成功させるためのポイントを5つ紹介します。

まず、**①探究学習のリソースの提供と入試制度をセットで設計すること**です。生徒には自分の興味・関心に基づいた活動を入試で評価されるメリット、大学には偏差値とは異なる軸で「この大学で学びたい」と思う生徒と接点ができるメリットがあります。そのためには、コミュニケーションの対象を、高校から生徒へと徐々にシフトさせるデザインが必要です。

プログラム策定にあたっては、**②最初から自分なりの「問い」を求めない**ことをお勧めします。多くの生徒にとって「問い」は難しく、強制するとやらされ探究になりがちです。高校生が興味を持ちやすいテーマを設定し、まずは探究をプロセスとして体験してもらうほうが、結果的にやる気を引き出しやすいです。例えば、ディスカバ！では「ディズニーの新企画提案」のテーマが人気です。生徒のやる気を促し、徐々に自律的な探究に移行させる工夫が大切です。

③プログラムの運営には学生を参加させるとよいでしょう。高校生から見れば親しみやすく、大学生自身の成長にもつながり、双方の学びの質が高まります。桜美林大学ではディスカバ！の受講生が大学入学後、高校生のメンターとなる好循環が生まれています。

④文化や言語が異なる高校と大学両者を橋渡しできるコーディネーターも不可欠です。高校教育の要件を理解し、時間調整も含めてカリキュラム設計ができる人材が適任です。

⑤複数年かけて取り組む覚悟も必要です。「総合的な探究の時間」は、高1、高2に設定されるケースが一般的であるため、複数年度をまたぐプロジェクトになります。その意味で、支援する高校は探究に熱心な教員がいるだけでなく、年度を越しても安定的に付き合えるかどうかを見極めます。近年、探究学習で特色化を図る学校も増えています。こうした視点を参考にしてみてください。

今後、取り組みたいのは、高校間連携の機会の創出です。理系が強い高校と文系が強い高校の合同探究発表会を試みたところ、同じテーマでもまったく異なる視点で探究し、お互いの刺激になったようです。こうした新しい学びの場を提供できるのも大学ならでは。若者の未来のために、高校教育に一歩踏み込んでいきませんか。